

ろう。なお、アメリカ地理学会会長のアブラー教授をはじめ、多くのアメリカ地理学者との論議がこの文の

ベースとなっている。

## 日本の木造住宅に思うこと

新井桂子

昨年、アメリカ合衆国東部のボストンを訪れる機会があった。そこで印象に残ったのはレンガ・コンクリートなど石造建築で占められたボストン市街地の風格あるたたずまいと、それとは対照的に、近郊の住宅地では、よく使われる「石の文化」という言葉が必ずしもあてはまらないと思われるくらいに木造の住宅が多かったことである。

アメリカもヨーロッパも十把一絡に石造建築とばかり思い込んでいたのだが、住宅が、雨風や暑さ・寒さ、外敵から身を守ることを第一の目的とした昔から、建築の際には最も手にいれやすい材料が使用されてきており、世界有数の木材生産国であるアメリカで木造建築が多いこともうなずける。

材料的な面だけでなく、建築技術においても、耐火性・耐震性に優れたツーバイフォー工法に百数十年の歴史を持ち、これらのことが、今日、アメリカの新築住宅の90%が木造であるという状況を生み出したのだろう。

一方、日本は「木の文化」という言葉に象徴されるように、木材は古くから建築材料として利用されてきた。それは、現代にも残る立派な寺社建築や、ケヤキの太い大黒柱に支えられ、100年・200年という年月を経て、子孫に受け継がれている民家に表われている。そして、今後は、21世紀へ向けて、国産材の供給量が現在の2倍以上に増加すると予想されている。

ところが、昭和30年代後半以降木材を使用した住宅は大幅に減少し、昭和61年には新設住宅の46.4%を占めるにすぎない。これにつれて木材の自給率も低下し、国産材の用材供給量は近年35%程度に止まっている。

このように木造建築が減少している背景には、関東大震災や第二次世界大戦による戦災を経験して耐火・耐震性のある住宅が指向されたこと、国土の狭いわが国では住宅不足の解決策として、建物の集合化・高層化が進められたこと、鉄骨、あるいはコンクリート建築では、資材が大量に供給されるようになり、住宅の各部分の工場生産が可能となって、品質の安定した住宅が

短期間に建てられるという木造在来工法にはない利点を持っているということがある。

また、住宅についても個人の嗜好は多様化し、生活の洋風化も手伝って、「アーリーアメリカン」とか「ヨーロッパアン」などの宣伝文句がついた、外観的には国籍不明の住宅が、展示場を賑わせている。大手メーカーによって供給されるこのような住宅は、安全性・機能性に富み、種類も豊富で、実物に近いモデルが見られ、価格的にも安心できるということから需要が伸びている。

これらの、つまりは「西洋風」の住宅は、日本人の内にある西洋的なものへの憧れが、近代以降現在まで根強く存在していることの表われのように思われる。

新幹線が京都に向かうと、米原を過ぎたあたりから、黒い瓦屋根に板壁、あるいは白壁の住宅が目立つようになり、京都に近づくにつれこういう住宅が圧倒的に多くなる。ふだん、コンクリートの壁に青色の屋根などという光景を見慣れている目には奇異にも映るが、日本の住宅にはこういう様式もあったのだということに、やがて気付く。

純和風のこのような住宅が何年か後に建て替えられる時、はたして現在のものは引き継がれるのか疑問ではある。これまでの燃えやすい、腐りやすい、狂いが出るという木材の欠点を克服できないままでは、今後木造建築を増やしていくことは難しいだろう。

しかし、総理府の調査によると、住宅の新築または購入を計画している人のうち84%が木造住宅を希望している。また、昨年、建築基準法が改正されて、例えば、東京23区内では70%の面積を占める準防火地域で木造三階建ての建設が認められた。これらのことは、将来、木造住宅の需要が伸びる可能性を示している。アメリカの木造住宅が化学的に処理された木材製品を用いることによって安全性を増し、シェアを伸ばしてきたように、日本でも、古来からの木造建築の技術をこれからの時代に適応するよう改良しつつ、国産材を利用した新しい木材製品を生み出して、現代の和風住宅が生まれることを期待したい。